短期派遣 EUROPA　派遣報告書

2011 年 9 月 17 日
東京外国語大学大学院
博士後期課程 2 年
信國萌

派遣先：ドイツ，ミュンヘン大学（Ludwig-Maximilians-Universität München）
専門分野：ドイツ語学
研究テーマ：ドイツ語形容詞，統語論，意味論
派遣期間：2011 年 8 月 1 日～2011 年 8 月 22 日（22 日間）

派遣の概要：

私は，2011 年 8 月 1 日～2011 年 8 月 22 日にかけて，ミュンヘン大学で開催された，日独対照言語学を中心としたサマーアカデミー（Deutsch-Japanische Sommerakademie Linguistik）ならびにワークショップ（Japanisch-deutscher Workshop Linguistik）に参加しました。また，サマーアカデミーでは，講演の聴講や議論へ参加するだけでなく，少人数グループでの研究発表会において，自身の博士論文のテーマについて発表を行いました。

まず，8 月 1 日から 14 日にかけて開催されたサマーアカデミーでは，統語論，言語類型論，モダリティという 3 つのテーマについて，ドイツと日本の複数の研究者による講演が行われました。講演は，大学院生の参加者でも理解しやすいよう，それぞれの議論の基礎から説明するように構成されていました。また，これらの講演に加え，サマーアカデミーの 1 週目の 8 月 3 日にはドイツの研究者による日本語学・文学の講演会が，2 週目の 8 月 10 日にはドイツや日本の博士後期課程の学生，ポストドクターの研究者による研究発表会が行われました。この研究発表会では，私も博士論文の執筆に向けて現在取り組んでいるテーマに関して，発表を行いました。

次に，8 月 16 日から 18 日にかけて開催されたワークショップでは，サマーアカデミーで講演を行った教授陣のみならず，若手研究者による発表も行われました。特に日独対照言語学を中心に，文の種類とその発話内行為の可能性，指示作用と同一指示，法とモダリティという 3 つのテーマについて，多くの発表が行われました。

サマーアカデミー，ワークショップを通じて，それぞれの講演・発表の後には，参加者によって活発な議論が交わされました。また，サマーアカデミー修了後には，ミュンヘン大学から成績証明書をいただきました。

研究成果及び今後の課題：

サマーアカデミー中に開催された研究発表会では，自身の博士論文のテーマに関する発表を行いました。発表タイトルは „Adjektive mit Akkusativrektion und ihr Gebrauch im

Deutschen（対格支配のドイツ語形容詞とその用法）“ です。この発表では，属格または対格支配とされている形容詞について，①実際に 1 つの形容詞が属格，対格のどちらも支配しているのか，②このような形容詞はどのような用法（述語的・付加語的・副詞的用法）に現れるのか，という 2 点に関するコーパス調査の結果を示し，考察を行いました。

調査には 9 つの形容詞を取り上げましたが，①に関しては，大抵の形容詞は属格または対格どちらかとのみ結びつくことが確認されました。また②に関しては，対格のみを支配する形容詞は述語的用法のみで用いられ，付加語的，副詞的用法で出現することはないという結果が示されました。このことから，形容詞は対格を形容詞単独で支配するのではなく，英語の be 動詞にあたる sein 動詞とともに，述語としてのみ支配するのではないかという考察を行いました。

この発表に対し，参加者から色々なコメントをいただきました。まず，ドイツ側のコーディネーターでもある Werner Abraham 先生からは，形容詞は名詞と似た性質を持つため，構造格すなわち主格および対格を支配せず，現代ドイツ語で対格と結びつく形容詞は，もとは属格支配であったものが，属格の衰退に伴って対格を支配するようになったとの指摘をいただきました。同様に，中高ドイツ語を研究している他の参加者から，今回の調査では格を明らかにしていなかった副文・不定詞を受ける代名詞 es（英語の it にあたる）も，もとは属格であったものが現代では対格として扱われているとの指摘をいただきました。さらに，調査で集められた例文では，多くの場合主語の意味役割が経験者（Experiencer），目的語の意味役割が起点（Source）であることが指摘されました。今回の発表では，このような意味論的な観点には目を向けていなかったので，今後は意味役割にも注目し，経験者—起点という意味的な組み合わせが，形容詞の統語的な振る舞いとどのように関連するかなどを検討することが課題です。

また，属格のみと結びつく形容詞と，対格のみと結びつく形容詞では，現れうる用法が異なりうると発表しました。しかし，今回の調査結果では有意な差は見られなかったため，調査するテキストの種類や，量を変更し，属格支配，対格支配の形容詞では現れる用法に異なりがあるのかどうかを明らかにすることも，今後の課題として挙げられます。これらの課題に取り組み，今回発表した内容を発展させ，博士論文の理論的基盤となるような研究論文を執筆することが，今年度の予定です。

今回の派遣により，初めて国際的な場での研究発表の機会を得ることができました。特に，発表で引用した重要な参考文献の筆者である Werner Abraham 先生から直接コメントをいただけたことは，非常に得難い経験でした。さらに，多くの講演や発表，議論に触れることで，ドイツ語での学術的な議論の方法を学ぶことができました。このような機会を与えてくださった本プログラムの委員会の皆様ならびに関係者の皆様，お世話になった先生方に心から感謝申し上げます。